

源氏物語の「うちわらふ」

白井清子

要旨

源氏物語に用いられているウチワラフは、思わず笑う、つい笑つてしまふ、ふと笑う、笑い出す、などと訳するのが適当なことで、ウチはその行為の突発的、急激的、瞬間的発生を示している。動詞の前に接頭語的につくウチは、「それにつく動詞の意味によつてその具体的な意味が少しずつ変わるが、現代語ならば「パツと」「ふと」などの副詞や「出す」のような動作の開始を示す接尾語で表すものを、平安時代にはウチで多く表したと思われる。源氏物語のウチワラフの具体的用例では、笑うという動作が瞬間的に短いものだというよりも、その笑いが予想されない場面で突然起こつたり、相手の言動に驚いて反射的に出たり、自嘲や皮肉、当惑などの心の動きが契機となつてふと出たりする笑いを示している。源氏物語では動詞ワラフとは明らかに区別して用いられている。

源氏物語の帯木の巻に、左馬頭の体験談で次のような場面がある。

① 容貌などはいたいしたことはなかったが、私の氣に入るようにとあれこれ努力するのでますますと思われる女がいた。ただその女の唯一の難点は嫉妬深いことであつた。そこでなんとかそれをなおさせたいと思ひ、女に、こんなに嫉妬するのなら別れるしかない、嫉妬深いのを改めるのならはこれからも一人の仲は続けられるだろうけれど、「かしこく教へたつるかなと思ひたまへて、われたけく言ひそしはべるに（強ク言ツタトコロ、女ハ）すこしうちわらひて（ソレナラモウ別レマシヨウト言ツタ）」 帯木50

〔巻のあとの数字は『源氏物語大成』の所在ページを示す。引用本文は小学館『日本古典文学全集 源氏物語』〔旧版〕による。ただし、表記を変えた場合がある。以下同じ〕

それまでの自分に対する女の様子から、自分が強くいさめれば、女はそれに従つてなんとか自分をひきとどめようとするだろうと左馬頭は考えていた。「別れましょ」と女がいうとは予想もしていなかつた。いやそれ以前に、こんな場面で女が笑うなどは想像もしていなかつたにちがいない。女の反応が全く予想外のことであつたことを、行為として端的に示すために用いられたことばがこの「うちわらひて」で、唐突に起こつた（と感ぜられる）笑いを示すことばではなからうか。これが単に短い笑いであるのなら、「すこしわらひて」だけで十分な表現である。

源氏物語のウチワラフを見ていくと、これに類した、唐突に起こつたと思われる笑い、その場にいる人が予想もしていなかつた笑いが多い。しかし、それについて述べる前に先学のウチワラフに関する説を見ておきたい。（注1）

二、これまでの説

ウチワラフを正面から論じたものとして近藤明氏の論（注2）がある。近藤氏は「ウチ+動詞」についてのそれまでの説の評価・批判を加えたのち、ウチワラフをとりあげ、次のように述べている。すなわち、源氏物語で単なるワラフは複雑な笑いを表す場合もあるが、「心底面白い・おかしいと思つての笑いや朗らかな笑い、嘲笑、からかいの笑い、冗談を言つたり聞いたりした時の笑いといったものが比較的多く」、また、「特に滑稽性の強い場面」で使われている。そ

れに對し、ウチワラフは複雑な笑いが多く、「一体に『ワラフ』に比べてより穏やかで激しくない笑い・大きな声を伴わない笑いを表すと言えそうである」としている。

ワラフがさまざまな笑いを表し、時に滑稽性の強い笑いを表すこともあるについては筆者白井も異論はない。しかしウチワラフについては「より穏やかで激しくない笑い・大きな声を伴わない笑いを表す」といえるだろうか。また、かにそうであったとして、なぜ、ウチがつくとそういう意味になるのだろうか。

あらためていうまでもないが、語の意味を探るためには、そのことばがどういふ文脈で用いられているか、類義語との違いは何なのかということだけでなく、その語形は何を示しているのかということも考えなければならぬ。近藤氏はその論を動詞「打つ」に由来する接頭語ウチとして述べ始めており、途中でそれに異を唱えている箇所も見出されぬいから、ウチワラフのウチも「打つ」から生じたものとしておられると思われる。しかし、「打つ」の意味と「一体に『ワラフ』に比べてより穏やかで激しくない笑い・大きな声を伴わない笑いを表す」こととはどうつながるのであるか。

ウチワラフを考えるにあたって、直接ウチワラフをとりあげてはいないが、「ウチ+動詞」について書かれていて参考になるものに大野晋氏と関一雄氏の二つの説がある。(注3)

大野氏は、本来の動詞ウツ(打つ)は、「物を他の物の表面に瞬間的に強くあてることである」それゆえ、これが他の「動詞の上につくと、その動詞に瞬間的だという意味が加わる」とし、「風うち吹き」は「風がさつと吹き」、「うちおどろき」は「はつと目が覚める」、「うち見る」は「ちらつと目に」する意である。そして「うち有るさま」とは「瞬間的の意から何気なく、軽い様子の意味になる」としている。この、大野説では接頭語ウチの語形と意味のつながりがわかりやすい。では、笑う動作の瞬間的なのがウチワラフだとすると具体的にどういふ意味になるのだろうか。

関氏は「ウチ+動詞」を二つに分ける。一つは「うち驚く」「うちかたぶく」「うち眠る」などのウチで、体の動きの発生を示し、「ハツと身を動かす」「何かを見たり聞いたりして即座に首をかしげる」「居眠りを始める」意味であり、他の一つは「うち思ふ」のように心の動きの発生を表現するもので、「ふと思ふ」や「思いが生じる」などの意味を表すも

のであるとする。

関氏の論は動詞によつてはこの解釈がよくあてはまると思われるものもある。しかし、ウチワラフの場合、笑う行為の発生を示すとはどういふことなのであろうか。関氏は「うちほほむむ」についてもふれておられるが、「ほほむむ」との違いがいまひとつわからない。そして何より、接頭語ウチが表す動作の発生と、動詞「打つ」の本来の意味とのつながりが明確ではない。したがっていくつかの疑問はこのころが、しかし、この論は示唆に富む点が多い。

三、唐突だと受け止められる笑い

先に、帯木の巻のウチワラフが唐突に感じられる笑いではないかとした。唐突な笑いとは解釈できそうなものがほかにある。

② 女三の宮のために後夜の加持が行なわれている時、六条御息所の物の怪が現れて、

「いと妬かりしかば、このわたりにさりげなくてなん日ごろさぶらひつる。今は帰りなむ」とて、うちわらふ。

柏木1242

これは物の怪の奇怪な行動を示すもので、この時の笑いは勿論穏やかな笑いとはかけはなれたもので、こんなところで笑うなどは予想もつかない、いきなりの笑いであつたのではなからうか。

物の怪とは正反対に位置するといつてもよい赤子にもウチワラフが使われている。なぜだらうか。

③ 中の君の若君が五十日を迎えたので、薫は祝いに訪れる。

(若君ハ) ゆゆしきまで白くうつくしくて、たかやかに物語し、うちわらひなどしたまふ顔を見るに

宿木1776

赤子に接していると、その行為には時々大人の理解できないものがある。赤子が急に笑つて(笑い声を出すとは限らない)、大人が赤子に「どうして笑つているの」と聞きたくなるようなことが時にある。ここはそれである。「物語し(イカニモオ話シテイルカノヨウニ喃語ヲ発シ)」という表現とともに赤子のありさまをしつかりと描いている。

突然笑う行為をウチワラフと表現するのは、先の大野説の「瞬間的」という意味とつながるであろう。ただしそれは、笑う時間が短いというのではなく、その笑いが唐突に出たことを表し、「思わず笑う」「ふと笑う」「つい笑ってしまふ」などの訳語をあてたほうが適切だと思ふ。

次のような場合も発生が予想できない笑いである。

④ 夕霧は野分の翌朝、源氏と紫上の寝所近くに行つた。咳払いをして自分の存在を知らせたが、

「何ごとにかあらむ、聞こえたまふ声はせで、大臣(源氏)うちわらひたまひて、」……」とて 野分869

「何ごとにかあらむ」とあるように中の事情がわからないので、源氏の笑いが夕霧には唐突に思われる。類例の野分864にも「いかにしたるにかあらむ」とある。ここがもし「大臣わらひて」であつたら、源氏と紫上とのひそやかなやりとりはあまり感じられなくなる。

ウチワラフが使われている場面を見ていくと、このように、笑いが生じると思つていない状況のときに生じた笑いを表していることが多い。

次の例はさまざまな解釈のなされているところである。

⑤ 末摘花の鼻の醜いのに驚いた源氏は適当な口実を見つけて末摘花邸を去ろうとする。

「朝日さす軒のたるひはとけながらなむかつららのむすほほるらむ」と(源氏ガ)のたまへど、(末摘花ハ)ただ「むむ」とうちわらひて、いと口重けなるもいとほしければ、出でたまひぬ。 末摘花222

男女が一夜を過ごして、男が立ち去る前に歌で女にことばをかけた。通常なら何かそれらしい返答があるだろう。源氏もそう考えていた。それなのに、末摘花はことばらしいことばを何も言い出せず「むむ」とウチワラフことしかできなかった。とつさの反応ではあるが、口をつぐんだままであかぬ笑い声にもならないような中途半端な笑い。これは地の文ではあるが、もちろん、居を突かれ当惑する源氏の側からみた笑いである。

①⑤のウチワラフは、その笑いに接した人が予期しなかった、突然と感ぜられる笑いである。

四、相手の予期せぬ言動によってひきおこされる笑い

ウチワラフには、相手の行為に驚き、呆れ、ある場合にはへえーと見直してなかなかのものだと感心し、さらには当惑したときなどに出る笑いがある。ウチワラフ事情はいろいろだが、いずれの場合も意外な、予想外なことに接して反射的に「思わず笑う」動作である。まずは、呆れて出る笑い。

⑥ 明石君たちが住吉に詣でると、折しも大勢の供をつれた源氏の一行が参詣していた。誰の一行かとその従者に尋ねると

「内大臣殿の御願はたしに詣でたまふを、知らぬ人もありけり」とて、はかなきほどの下衆だに心地よげにうちわらふ。
遷標 499

これは、そんなことも知らないのかと呆れた従者の瞬間的に出た反応である。笑い声が聞こえてきそうである。

⑦ 朧月夜に逢つてきた源氏は紫上に弁解がましくいう。

「物越シノ対面タツタノデ心残りデス。」いかで、人目とがめあるまじくもて隠して、いまひとたびも」と語らひきこえたまふ。(紫上へ)「うちわらひて」「いまめかしくもなり返る御ありさまかな。……」とて、さすがに涙ぐみたまへるまみのいとらうたげに見ゆるに 若菜上 1074

朧月夜に逢つてきたことの真実を「まかし」「いまひとたびも」という源氏に対し、疾うにお見通しの紫上は、内心呆れ、且つまた自分かみじめに寂しく感ぜられた。これは笑い声が聞こえるか聞こえないかくらいの笑いであつたかもしれない。

⑧⑦のふたつは相手の行動をマイナスにとらえての反応であつた。しかし、かわい、なかなかのものだとプラスに

感じるような、相手の意外な一面や予想外の言動に接したときの反射的な笑いもある。

⑧ 夕霧やその若君たちが加わって女楽が行なわれた。その人たちに源氏やその他の方々から祿が与えられた。

おとど(源氏)「あやしや。物の師(源氏自身ヲサス)をこそまづはものめかしたまはめ(第一二重ンジテクダサ
イ)。……このたまふに、(女三)宮のおはします御几帳のそばより御笛を(女房ガ)奉る。(源氏ハ)うちわら
ひたまひてとりたまふ。いみじき高麗笛なり。 若菜下1161

自分のたわぶれのことばにすぐに女三宮が応じた。いつもの女三宮とは違ひそのすばやい対応に感心した源氏の反応である。

⑨ 源氏に会おうと夕霧は六条院の紫上の居所に行った。すると、三歳の匂宮が出てきた。

「大将こそ(ヨ)。宮(自分ノコト)抱きたてまつりて、あなた(明石ノ女御ノ居所)へ率(あ)ておはせ」と、み
づからかしこまりて(敬語ヲツケテ)、いとしどけなげにのたまへば、(夕霧ハ)うちわらひて 横笛1281
幼児の予期せぬかわいらしいことばに反射的に出た笑いである。

⑩ ⑨のふたつは相手の行動をプラスにとらえての反応であった。ところがその相手の行動がプラスともマイナスとも
いえないものがある。例えば、こちらが考えていることと全く違ひことを実は相手は考えていたというときなどで、そ
れを知ったときの驚きやとまどいなどから反射的に出る笑いがある。

⑩ 北山の僧都は源氏に対して現世の無常や後の世のことなどを語っていたが、源氏は昼間みた少女のことが気になつ
て

「いかにものしたまふは誰にか。たづねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」と聞こえ
たまへば(僧都ハ)うちわらひて「うちつけなる(突然ナ)御夢語りにははべるなる」 若紫160
「うちつけなる」ということばにも僧都の不意に感じた気持が読み取れる。

⑪ 六の君と一夜を過し戻ってきた匂宮に、中の君は特別の態度もとらない。中の君のからだがすぐれないので修法を延長した方がよいと心配する匂宮であるが

(中ノ君) 「昔も、人に似ぬありさまにて、かやうなるをりはありしかど、おのづからいとおこたるものを」
とのたまへば、(匂宮ハ) 「いとよくこそさはやかなれ」とうちわらひて 宿木1725

自分に嫉妬を訴えないばかりでなく、中の君自身のからだのことも大騒ぎをしない態度を「さはやか」と言った。中の君自身は諦めの気持であっても外面的にはすっぱりと割り切っている、こたわらない態度と見える。この中の君の言動はプラスともマイナスともいえないが、匂宮にとつては意外な感じがしたであろう。

五、笑う主体の内面を主とするもの

このような相手の言動が直接の契機となつて起こつた笑いと別々に、笑いを発する主体の心に何らかの感情が湧いて、それが契機となつて生じる笑いがある。

⑫ 落葉宮は寝所からかるうじて逃げて夕霧とはふすま一枚を間にしているだけである。

いとものはかなき固め(女房タチガフスマヲオサエテイルダケ)なれど、(夕霧ハ)引きも開けず、「かばかりのけちめをと、強ひて思さるらむこそあはれなれ」とうちわらひて、うたて心のままなるさまにもあらず(思イノママノ情ケナイフルマイハ抑エテイル) 夕霧1317

これは「はかなき固め」をしている相手の行動に対してウチワラフのではなく、相手の行動に接して無理には引き開けようとしない自分の心を見ての夕霧の自嘲からふつと出る笑いである。

⑬ 僧都から浮舟の事情を聞いた薫は、浮舟の弟の小君を使いに行きたいので僧都に一筆をと頼む。しかし、僧都は断る。

(僧都) 「なにがし、このしるべにて、必ず罪えはべりなん。……今は、御みづから立ち寄らせたまひて、あるべか

らむことはものせさせたまはむに、何の答かはべらむ」と申したまへば、(薫ハ)うちわらひて、「罪えぬべきしるべと思ひなしたまふらんこそ恥づかしけれ」 夢浮橋 2060

僧都のことは意外だったというよりも、実は、僧都に自分の気持を見透かされていたので、つい苦笑がもれたということであらう。

ウチワラフの複合語ウチワラヒオハサウズもこれと同じ用法と考えられる。

⑭ 左馬頭の体験談と女性観を聞いた頭中将と源氏。

(頭) 中将、例の(ヨウニ)うなづく。君(源氏) すこしかたゑみて、さることとは思すべかめり。いづかたにつけても、人わるくはしたなかりける御(み)物語かな」とて、うちわらひおはさうず。 帚木 55

オハサウズは主語が複数であることを示すことばなので、ここは左馬頭の話聞いてそこにいた男たちがそれに同感だと、パツと笑ったことを示す。

実はウチワラフにはこういう自嘲気味の笑いや、苦笑、嘲り、皮肉、当惑を含んだ笑いの例が多い。しかし、だからといってウチワラフということばそのものがその意味を有しているというのではない。そういう感情をいだいたときに思わずふつと出る笑いがウチワラフなのである。

勿論、これら⑬⑭の例も相手の言動に接して生まれる感情であるから、「四、相手の予期せぬ言動によってひきおこされる笑い」との共通性はある。違いは驚きの感情がひきおこす直接の反射的な笑いか、相手の言動を受けて自分の心に自嘲や当惑などが生じ、それがふと表出される笑いかということである。こう考えてくると、先にとりあげた「ウチオ動詞」についての関氏の説、ウチは動作の発生を示す、という指摘が思い出される。動作の発生が突然であるのがウチワラフのウチであらう。

笑いに限らず、怒りも喜びも悲しみも、周囲の言動や状況によつて起こるわけであるから、何もわざわざウチワラフについてだけ特別のように指摘することではないという反論もあるだらう。しかしウチがつくとその行為が徐々になどということはなく、瞬間的に起こることがより明確に表されるのである。

六、ワラフとの違い

「こまで書き進めてくるといくつかの疑問が出てくる。そのひとつが、ワラフにも「思わず笑う」笑いがあるのではないか、ということである。確かにワラフにも「思わず笑う」場合がある

⑮ 源氏と源典侍との逢瀬に、頭中将は懲らしめてやろうと忍び入った。

(源氏ガ) 太刀抜きたる(頭中将ノ) 腕(かひな)をとらへていといたうつみたまへれば、ねたきものから、(頭

中将ハ) えたへでわらひぬ。 紅葉賀259

これはいきなりの笑いである。

しかし、ワラフはもつと異なる場合にも使われる。

⑯ 雲居雁と夕霧との仲を心配する内大臣は、それまでの大宮の放任を非難する。

「さぶらふめる人々も、かつはみなもどきわらふべかめるものを」 少女684

こういう日常的な習慣的な笑いをウチワラフが表すことはない。

そのほかでもワラフはバラエティーに富んでいる。それは近藤氏が述べていると先に紹介したとおりである。

ワラフとウチワラフでは、その接続のしかたにもかなりの違いがある。

最も顕著な点は、ワラフには受身のワラハルや、使役のワラハス、推量のワラフラムなどの用法があるが、ウチワラフにはない。先に述べてきたようなウチワラフの意味では、受身・使役・推量になりにくいからである。逆に、ウチワラフは接続助詞テに続く用法が多い。ウチワラフ全六〇例中、ウチワラヒテが三四例、ウチワラヒタマヒテ九例で、両方を合わせると、四三例となり、全体の四分の三近くがこの用法であることがわかる。ワラフでは七一例中ワラヒテ、ワラヒタマヒテあわせて一五例で、接続の面からもワラフの方が用法が広い。

次に出てくる疑問はエムとウチエム、ホホエムとウチホホエムはどうかということである。これについては詳しくは省略するが、ワラフとウチワラフとの関係に類する傾向はうかがえる。ただし、ワラフとウチワラフほどの差は認めにくい。これは、おそらく、ワラフと、エム・ホホエムの表す動作の大きさが異なるからではなからうか。ワラフとエムの違いは枕草子に「あみたる声になりて」(注4)とある例などから考えると、必ずしも笑い声の有無というものでもない。それよりも、ワラフは顔・からだ・声・表情いずれとも限定しないのに対し、エム・ホホエムはニッコリとかニヤツ・ニタリ・ニンマリするといった顔の表情の変化を中心に表すものと思われる。

⑪ 大抵の女は期待外れになるという頭中将の話に源氏は

我も思しあはすることやあらむ、うちほほみて

帯木38

ウチが加わることによつて、ニヤツという表情の動きがより明確に感じられるようである。

さらに湧いてくる疑問は、平安時代の源氏物語以外の作品においてもウチワラフに同じことがいえるか、ということである。源氏物語以外では、宇津保物語に六八例、蜻蛉日記に七例、枕草子に六例、栄花物語に四例などがある。いま、これについても詳述する余裕がないが、基本的には源氏物語と同じ傾向がうかがえる。

蜻蛉日記に次のような例がある。

⑫ 養女への求婚のために遠度がやつてきた。性急な遠度に対してまず道綱が対面した。

(遠度ハ)「まづ(御母上三)御消息聞こえさせたまへかし」としのびやかに言ふなれば、(トリツグタメ二道綱ガ作者ノ居所ニ)入りて、「さなむ」とものするに、「思しよらむところに聞こえよかし」など言へば、(遠度ハ)すこしうちわらひて、よきほどにうちそよめきて(扉ノ間ニ)入りぬ。(下・天延二年四月)(注5)

遠度は自分がどう扱われるか心配してきたであろう。しかし、適当に受け流そうとして言った作者のことは、この邸

への出入りが許されたと思つて、遠度は喜んで思わず笑いをもらした。

七、まとめ

以上、みてきたように、源氏物語のウチワラフには予期せぬ状況で出た笑いや、相手の言動に驚いて思わず出た笑い、自嘲や苦笑など、さまざまな複雑な心の動きが形となつてふと出た笑いなどがある。笑い声の大ききや長さはそのときどきで変わるけれども、共通しているのは、パツと瞬間的に出る笑いである。

ウチワラフについての近藤説に疑問をいだいて調査し始めたが、この結論は結局「ウチノ動詞」についての大野説や、動作の発生に注目した関説の妥当性を確認するものとなつた。

さきに説明を加えながら考察してきた例も含め、源氏物語に出てくるウチワラフの全用例をその使われ方から分類したものを以下に示しておく。(ただし、この分類項目は当然互いに連続しているものであり、ひとつの用例をどの項目に含めるか判断に迷うものも多かった。一応のめやすと考へていただきたい)

ウチワラフ 全六〇例の用法の分類(注6)

A 不意な、唐突な笑いだと感じられるもの

ア、動作主体の行為が物の怪や赤子・幼児などで、他者に理解できない笑い 柏木1242・横笛1273・宿木

1776

イ、のぞき見などをしていて、事情がよくわからないときに出る笑い 野分864・869・橘姫1523

ウ、笑いが出るような状況ではないときに出る笑い 帚木50・末摘花222・葵309・浮舟2019

B 相手の予想外の言動に接して驚いたときなどに反射的に出るもの

ア、相手が呆れるような、マイナスに感じられる言動をしたときに出る笑い 若菜189・末摘花211・濤標

499・蓬生534・常夏844・848・行幸909・真木柱966・若菜上1074

イ、感心したり、意外な発見をしたりして、プラスに感じられる言動に接したときに出る笑い 夕顔123・

末摘花229・少女669・野分873・藤裏葉1004・若菜下1161・横笛1280・1281・夕霧
1332②

ウ、大袈裟な行為や驚くことに接して、プラスともマイナスともいえない、ないまぜの感情を抱いて出る笑い 若紫

160・末摘花205・滯標490・松風593・玉鬘753・行幸892・夕霧1332⑩・1359・橋姫
1522・宿木1725・1787・東屋1843

C 自嘲・当惑・ごまかし・からかい・皮肉などの感情が契機となつて出る笑い 初音763・常夏835・藤袴

920・923・真木柱942・梅枝981・若菜上1102・1119・鈴虫1293・夕霧1317・

1318・1361・竹河1482・1499・椎本1574・総角1634・浮舟1903・手習2017・

夢浮橋2060

帯木55(うちわらひおはさうず)

注1 本文で触れたもの以外ではたとえは次のようなものがある。注2で詳しく検討が加えられているものもあるの

で(こ)では文献名のみを掲げる。

富士谷成章『かざし抄』「うち」の項

橋純一「徒然草通釈(中巻)自薦がてら」『国語解釈 第四卷二月号』所収 1939年

松田三枝子「清少納言枕冊子の動詞について——複合動詞を中心にして——」『平安文学研究 二十八輯』所収
1962年

阪倉篤義「接頭語『うち』の消長」『国語語彙史の研究 四』所収 和泉書院 1983年

2 近藤明『ウチワラフ』の意味の時代的变化——『ウチ動詞』の意味変化の一例——『国語語彙史の研

究 十六』所収 和泉書院 1996年

- 3 大野晋 『日本語をさかのぼる』岩波新書 1974年
 関一雄 「接頭語『うち』の意味——『源氏物語』『枕草子』『夜の寝覚』の用例について——」 『平安時代
 和文語の研究』所収 笠間書院1995年
- 4 『日本古典文学大系 枕草子』(岩波書店) 一六一段による。
- 5 本文は『新編日本古典文学全集 土佐日記 蜻蛉日記』による。
- 6 『源氏物語語彙用例総索引 自立語篇』(勉誠社)に含まれていない、鈴虫1293の例も含めてある。